水稲

令和６年産早期水稲について

水　稲
田代　好幸
農畜産課
0969-22-1105

令和6年産の早期水稲の準備が始まる頃となりました。5年産については、移植期より概ね生育は順調に推移していましたが、出穂期の6月末から7月にかけて、日照時間が平年より少なく気温が高く推移しました。このため、日照不足による生育の遅れにつながり、また台風等の影響により全体的に早刈り傾向となったことから、収量・等級に大きく影響した年となりました。病害虫の発生については、いもち病・害虫の農薬等の変更、水稲栽培こよみの見直しを行ったことから、全体的に影響は少なかったようです。

今後は、気象状況の変化に伴い、高温障害等による収量減及び品質低下が予想されることから、健康な稲作りが必要となるので、適正な育苗管理と適正な水管理を行っていきましょう。
本田の準備については、堆肥や土壌改良資材を規格数量の投入することで、地力の改善が図られますので実施して下さい。（作土を15㎝以上確保するよう心掛けて下さい。）

健苗の育成

種子は充実した、健全なものを使いましょう。そのためには必ず種子選（比重選）を行って下さい。（比重水10ﾘｯﾄﾙに塩2kg）

病害虫防除のために種子消毒（エコホープDJ200倍液に24時間浸漬）と育苗箱の洗浄を行いましょう。

早期水稲の育苗日数は25日程度ですので、田植え日から逆算して播種日を決定しましょう。2葉苗～2.5葉苗の場合の播種量は乾籾で150g（催芽籾では180g）が基準となります。播種に最も適しているのは、ハト胸状態の時です。そのためには十分に浸種を行って、水の入れ替えと1日1回は攪拌して水温が均一になるようにしましょう。

水田の準備

（※一発肥料の施肥量について）

特別栽培米用の一発肥料（元肥）の散布量は10a当50kgです。尚、注意点と致しまして、田植同時の側条施肥を実施の生産者の方は、1～2割の減量にて散布をお願いします。

本肥料を利用の際は、活着肥料の使用は控えて下さい。

野菜

シシトウ・甘長とうがらし栽培

野　菜
坂田　沙貴
上島営農指導センター
080-1759-0091

露地栽培

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
シシトウ	△		■	■	■	■	■	■
甘長とうがらし	△		■	■	■	■	■	■

定植：△　　収穫：■

定植

1. 植穴は、苗鉢よりもやや大きめにし、50 ～ 70㎝間隔であける。
2. 定植苗は、第一果房が開花する3～4日前の若苗を定植する。
3. 定植時には、アブラムシ・スリップス対策としてスタークル粒剤を1株当たり1 ～ 2g植穴処理する。
4. 定植を行う際は、鉢土の上2㎝位が見える程度浅植えする。
   ※植え付けが深いと白絹病や疫病の原因となる。
5. 定植後、初期生育促進の為に、株元に液肥潅水する。
6. 定植後、直ちに支柱に誘引する。

定植後の管理

1. 定植後7～ 10日頃までは、鉢土が乾燥しないように株元に灌水し、根の活着を促す。
2. 活着後は、徐々に潅水量を減らし、根を深く張らせる。
3. 第一分枝以下の果実・脇芽は、早めに取り除く。
4. 定植後20日前後までに、本支柱及びネット張り（2m間隔）を行う。

整枝・誘引

1. 整枝は、出来るだけ中心に光線が入るように摘芯する。
2. ネット張りは、樹の生育に合わせて行う。高くなった場合は、2段目を張る。

施肥量

シシトウ　　10a当り／kg

必要成分量	N	P	K
元肥	30	25	30
追肥	10	10	10
合計	40	35	40

甘長とうがらし　　10a当り／kg

必要成分量	N	P	K
元肥	15	20	15
追肥	15	15	15
合計	30	35	30

詳しいことは各地域の担当者、又は栽培講習会等でお聞き下さい。

果樹

2月、3月の柑橘園管理

果　樹
原口　悠貴
下島営農指導センター
080-2725-7775

1.土づくり

良い作物作りはまず健全な土づくりから始まります。土壌分析を行い、園地に合わせた土壌改良を行いましょう。下記の表は10a当たりの目安量となりますので、参考に投入してください。

時　　期	資材名	10 a当たり	備　　考
2～3月(収穫後)	堆肥	2,000 k g	完熟物
	客土	4,000 k g	3㎝以内
	ヤシガラ	20 袋以上	2キュービック(120ℓ／11kg)
	土の恵み	12 袋以上	堆肥・ヤシガラの代わり
	天然フルボ酸（粒）	3袋	ミネラルバランスの調整

2.葉面散布

収穫が終了した樹については、まずは樹勢を回復し、その後花芽分化促進を行いましょう。

目的	薬　剤　名	希釈倍数	備　　考
樹勢回復	尿素又は アミノジューシー N14 又は神協スピリッツ	500 倍	収穫後 3回程度 集中散布
花芽分化促進	ファーメント　又は ジューシーエース	500 倍	樹勢回復後 3回程度散布

3.病害虫防除

対象病害虫	品　　種	農薬名	希釈倍数	散布液量(100ℓの場合)	備　　考
かいよう病	温　州 中晩柑	IC ボルドー 66D	60 倍	1,666 g (ml)	発 芽 前
ミカンハダニ	中晩柑	ハーベストオイル	80 倍	1,250 g (ml)	発 芽 前
	温　州		100 倍	1,000ml (g)	発 芽 前

※かいよう病防除はムッシュボルドー（DF）500倍も使用可。(散布液量100ℓの場合200g)
※ハーベストオイルを散布していない園では、カイガラムシでアプロード水和剤1,000倍。混用アビオンE1,000倍を散布する。

4.施　　肥

栽培タイプ	肥料名	品種名	施肥時期	10 a当たり
全	炭酸苦土石灰	全品種	2月上旬	10 袋
超省力化(年1回)	新有機中晩柑一発(13-8-7-2)	河内晩柑・清見・甘夏パール柑・デコポン	2月上旬	10 袋
省力タイプ	新アグリロング 28 号(12-8-8-2)	河内晩柑・清見甘夏・パール柑	3月上旬	5袋
		デコポン		5袋

※(　)内はN-P-K-Mgの成分量

畜産

子牛の冬場の管理について

畜　産
井上　正一
黒毛牛検定センター
080-1729-1626

冬場は子牛のトラブルが発生しやすく、厳しい環境の中、へい死事故につながることもありますので、ここからは子牛の冬場の管理について注意点を述べ ていきます。

分娩時

子牛の分娩直後ですが、体表は羊水などに濡れた状態ですので、母牛が子牛を舐めることによって体温の放散が防がれますが、濡れたままでは、子牛の体温が急激に低下します。母牛が舐めない場合にはタオルや新しいワラなど子牛をマッサージして体表の乾燥と活性を促す必要があります。出生子牛の低体温は その後の発育に大きく影響するため必ず防いでほしいものです。子牛は抵抗力のない状態で生まれてきますので、出生後はなるべく早く、またなるべく多くの初乳を与える事が重要です。

育成期

代用乳給与については基本として「定時、定量、定温」と言われています。

子牛が代用乳を飲むときの温度は季節を問わず一定ですので、外気温の低い冬場は代用乳を溶かす温度に注意する必要があります。

またスターターや育成飼料を充分に採食させるためには飲水が大事ですので、凍結防止等で飲水量を落とさないように注意しましょう。

また、濡れた敷料と乾燥した敷料では体熱の放散が格段に違うため、敷料をこまめにチェックして交換することも重要です。また、牛舎用のヒーターの設置・防寒ジャケットやネックウォーマーを使って保温対策も有効です。

日中の暖かい時間は換気して、呼吸器病の予防に努めましょう。

もうひとつ大事なことは栄養の充足です。寒い時期の子牛は被毛が立っていることがありますが、これは寒さによる熱の放散を防ぐものです。また真菌症の発生が多い場合も栄養不足が推測されます。

上記の注意点に気をつけられて適切な飼養管理で子牛の疾病･事故を防ぎましょう。